



Title	『大鏡』における「魂」観の再検討
Author(s)	石原, のり子
Citation	詞林. 2004, 36, p. 30-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67526
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『大鏡』における「魂」観の再検討

石原 のり子

一 問題の所在と先行研究

『大鏡』における「魂」という語はこれまで、撰関家嫡流の人物に固有の特性であるかのように捉えられてきた。研究史を概観すると、渡辺実氏が、「大鏡がスローガンのように繰返す「心たましひ」「やまとだましひ」とは、逞しい意欲を含んだ決断力、強い実行力に支えられた行動性の、大鏡的呼称であろう」と規定されて以来、「魂」という語に着目した論究がなされるようになった。保坂弘司氏は、『大鏡』における人間的優越は学問・和歌の教養よりも、より多く「こころだましひ」「やまとごころ」を根底としている」とされ、河北騰氏は、「後年、偉大な人物となり、撰関家の主流を嗣ぐような人々は、皆、この不屈の気骨や気魄のある人物ばかりで、不幸、権勢の座につけずに敗退した人々は、例外なくこの点に欠ける所があったのだ、という様に考えて書いて行くようである」とされた。また、渡辺氏は前述の論を発展させ、「勇敢な「こころたましひ」こそが最大の価値で

あった。(中略)人が「こころたましひ」の人である時、それが神仏の助けを引き寄せるのだ、というのだから、道長の類まれな栄達は、道長に備わった「こころたましひ」が勝ち取ったものだ、と『大鏡』は言っていることになる。勝者となることを保証するような内面の備わり、それは不可能を可能にする勝者の備わりである」と述べられた。このような、「魂」が撰関家嫡流の人物に特有の用語であるという考え方が、『大鏡』研究における「魂」についての大方の見方となっている。

しかしながら、これらの論は、「魂」が道長を評する語として用いられているという点に着目するあまり、道長以外に「魂」ある人とされる人物全般に対する検討がなされておらず、再考の余地があると思われる。

また、秋本宏徳氏は、時平に関するご論考において、「魂」が「政治的には不遇に終わった義懐・道雅・隆家や、短命ゆえに政権を子孫の代に継続し得なかった時平その人にも付与されるなど、「才」との対照性は必ずしも徹底されていると

は言い難い^⑥」と言及されており、その点については、首肯される。しかし、時平の讒言によって道真が罪なくして左遷されたこと、道長からの庄迫によって小一条院が東宮退位に追い込まれた例を挙げ、時平と道長の「魂」は、彼らの対立者に政治生命の危機をもたらす凶器となる点が共通しており、またその性質は時平と道長のみならず共有されている、とされる点については、賛同しがたい。この点については後述する。

二 『大鏡』に見える「魂」

まず、『大鏡』に見える「魂」の用例を見ていく。『大鏡』において「魂」があると語られる人物を登場順に挙げると、時平、円融天皇の舅たち（伊尹・兼通・兼家）、行成、義懐、道雅、隆家、道長、清範律師、そして重木の妻である。

まず、これまで最も注目されてきた道長についての用例を見てみる。花山天皇の御世に、道隆・道兼・道長兄弟が、帝に肝試しをされたときのこと、怯えて逃げ帰った兄たちを後に、ただ一人指定された場所までたどり着けた道長について、

さるべき人は、とうより御心魂のたけく、御まもりもこはきなめりとおぼえはべるは。
(道長伝 三三八頁)

と述べ、「御心魂」の強さゆえに、神仏の加護を得、子孫が衰退した兄の道隆や道兼とは異なり、栄華を極めたのだと言っているのである。これまでの研究では、この用例を重要視するあ

まり、その他の用例に注意が払われてこなかったきらいがある。しかしながら、『大鏡』における「魂」観を明らかにするためには、個々の用例に対する吟味が不可欠であるため、少々羅列的になるが、全用例を引くこととする。

まず時平については、世間に儉約の規制が徹底せず、贅沢の風潮が蔓延していた折、一際豪華な装束を着けて参内した時平が、醍醐天皇の逆鱗に触れ、謹慎し、それを見た世間の人々が過差を改めた。しかし、実はそれは天皇と時平が示し合わせて行った芝居であったという出来事を語った後、

さるは、大和魂などは、いみじくおはしましたるものを。
(時平伝 八八頁)

と述べている。また、時平・仲平・忠平兄弟を見た高麗の相人の言葉として、

御かたちすぐれ、心魂すぐれ賢うて、日本にはあまらせたまへり。日本のかためと用ゐむにあまらせたまへり。

(雑々物語 四一頁)

と語っている。相人は、弟の仲平と忠平についてそれぞれ「あまり御心うるはしくすなほにて、へつらひ飾りたる小國にはおはぬ御相なり」、「あはれ、日本国のかためや。ながく世をつぎ門ひらくこと、ただこの殿」と評し、それを聞いた忠平は、兄弟の中で自分が一番学識もなく、媚び諂う人間だと言われたのだ、と嘆いたという。

次に、源高明女を妻としていた為平親王が東宮となると、

高明の手に政権が移ることを危惧した伊尹・兼通・兼家兄弟が、強引に守平親王（後の円融天皇）を東宮位に就けたことを指して、

そのゆゑは、式部卿の宮「為平親王」、帝に居させたまひなば、西宮殿「源高明」の族に世の中うつりて、源氏の御榮えになりぬべければ、御舅たちの魂深く、非道に御弟「守平親王」をば引き越し申させたまへるぞかし。
（師輔伝 一五三頁）

と述べている。この例では、「非道」という語とともに用いられており、また長幼の序を破っているという点からも、全面的に肯定しうる行動として使われているとは言い難い。また、為平親王の立太子は、「世の中にも宮のうちにも」当然視されていたことだったと語ることからも、その行動に対する批判が窺えよう。そして、源高明は、安和の変によって失脚させられてしまう。これは、先述の秋本氏の説かれる、対立者に政治生命の危機をもたらす凶器となる「魂」の例と言えるだろう。つまり、そのような「魂」は、時平と道長のみに見られるものではないのである。

次に、一条天皇に扇を、後一条天皇におもちゃを献上するにあたり、他の貴族たちはこぞって豪華なものを作らせる中、得意の手跡で見事な書を書いた扇や、幼い天皇が今まで見たこともない独楽を献上し、両天皇の御感を蒙った行成を評して、

少しいたらぬことにも、御魂の深くおはして、らうらじうしなしたまひける御根性にて、……
（伊尹伝 一八九頁）

と語っている。

義懐については、花山天皇の叔父として政治にあたった義懐の力によって、天皇自身の奇矯な行動が目立ったにも関わらず、その治世が「内劣りの外めでた」と称賛されたことを、

その中納言、文盲にこそおはせしかど、御心魂いとかしこく、有識におはしまして、花山院の御時の政は、ただこの殿と惟成の弁として行ひたまひければ、いといみじかりしぞかし。
（伊尹伝 一九二頁）

と記している。

また、道隆の孫である道雅については、妻の大和宣旨が道雅の許から密かに逃げ、妍子皇太后に出仕したことに對して、さるは、かの君、さやうに痴れたまへる人かは。魂はわきたまふ君をは。
（道長伝 二七〇頁）

と評している。しかし、道雅は、前齋宮（三条天皇皇女・当子内親王）と密通事件を引き起こし、三条天皇の逆鱗に触れたり、感情的で奇矯な行動の目立つ人物で、世間の人々からは「荒三位」「悪三位」と呼ばれた人物であり、『小右記』に詳しい記録がある。この世評と、『大鏡』の「魂をわきたまふ」人という評価とは少なからぬ隔たりがある。ただ、『榮花物語』にも、伊周の遺言として「とりわきいみじきものに

言ひ思ひしかど、位もかばかりなるを見置きて死ぬること。

われに後れていかげむとする。魂あればさりとともは思へども、いかにせんとすらんな。いでや、世にありわづらひ、官位人よりは短し、人と等しくならんなど思ひて、世にしたがひ、ものおぼえぬ追従となし、名簿うちしなどせば、世に片時あり廻らせじとす。その定ならば、ただ出家して山林に入りぬべきぞ」(巻第八はつはな①四五〇頁)と、「魂」の語が見える。このことが、『大鏡』の記述に影響している可能性が指摘できるだろう。また、『大鏡』は、伊周に対しては痛烈な批判を繰り返すのであるが、その息子・道雅に対しては、世間の風評とは裏腹に、彼の奇矯な行動については一切語らないばかりか、「魂をわきたまふ君」とするのは、注目すべき点である。井上宗雄氏が指摘されるように、『大鏡』作者も、彼の言動を、「単なる性格破綻者ではなくて、何らかの目的なり底意なりを秘め」る故のものと捉えていたと言えるかもしれない。

同じく中関白家の隆家については、前述の道雅についての記述に続けて、

それも、いみじう魂おはずとぞ、世人に思はれたまへりし。
(道隆伝 二七二頁)

と記している。隆家についても、『栄花物語』に「またすこし物の心知りたる心ばへある人は、「……中納言」「隆家」こそ、かしこくおはせずなりにけれ。なほたましひはおはする

君ぞかし」などぞ聞えける」(巻第五浦々の別れ①二六四頁)と、「たましひ」という語が見え、道雅同様、『栄花物語』の影響が看取される。また、道雅から隆家と、中関白家の人物について、立て続けに「魂」があると語る点にも注目すべきであろう。

撰関家嫡流の人物で、「魂」という語をもって語られるのは、道長を除けば、道長の父・兼家だけである。しかも、兼家については、「非道」という言葉とともに用いられており、肯定的な意味での使用ではない。しかも、守平親王の立太子の策謀を直接的に取り仕切ったのは、当時親王の別当職にあった兼家であり、『大鏡』もそれを語っている。実際に行動に移した兼家だけを指して「魂深く」と言うこともできたところを、あえて「御舅たち」と、道長の直系の父祖ではない伊尹と兼通も含む表現をしているのである。

また、『大鏡』が痛烈に批判の言葉を並べる時平に対して、二度にわたって「魂」なる語を用いるのに対して、重木が「宝の君」と仰ぎ、道長直系の祖先である貞信公忠平に対しては、用いようとしない点にも、注意が必要である。

それだけでなく、清範律師の説法の巧みさ(雑々物語)や、重木の妻の家政能力(雑々物語)に対しても、それぞれ「魂」、「世間魂」という語を用いていることにも注意すべきであろう。清範律師に対して用いられている「魂」とは、機転やセンスの良さといったもので、前述の行成のそれと類似してい

る。

以上の点から明らかにするのは、「魂」とは、これまで言われてきたような、撰閔家嫡流の人物にのみ用いられるというものでもなく、また、全面的に肯定される最重要の価値でもないということである。つまり、「魂」とは、ときには謀略の色さえ覗かせる政治的判断力、センスや機転、そして実務処理能力といった、多種多様な意味を持つ語であると言えるだろう。それでは、「勝者の備わり」と言えるような、撰閔家嫡流の人物にのみ見られる共通した逸話はあるのだろうか。

三 怪異現象をめぐって

塚原鉄雄氏は、「大鏡史観に立脚するとき、怪異体験は、傍流天皇にあって主流天皇になく、傍流大臣になくて主流大臣にある。(中略)怪異体験で、大臣には被害がなく、天皇には被害がある。怪異体験の天皇は、怪異に支配され、怪異体験の大臣は、怪異を超克する、——そういった傾向が、明瞭に看取されるのである」と述べられ、怪異体験が重要な視座であることを指摘された。そして、「藤氏に最大の強敵であった道真を破滅させた時平は、大鏡の時点における近代藤氏の始祖といえよう。(中略)藤氏独走の実質を確保したのは、時平の遺産を継承した忠平であった。実質的な藤氏近代の歴史は、忠平を起点とする」と述べ、兼家の怪異体験につ

いては、「大入道殿すなわち兼家の基本姿勢は、怪異黙殺であった。(中略)兼家の態度には、兼家自身の存在が怪異の跳梁を容赦しないといった自信を、確実に看取しうる。怪異体験が、兼家において、弱者の体験から強者の体験へ、そして、常人の体験から超人の体験へと、画期的な転換を実現したのである。この転換は、藤氏主流の系譜を継承する兼家だけに実現しえた、極度に例外の孤例であった」とされた。しかし、前章で扱った「魂」観の理解をふまえると、時平を主流の系譜に組み込む点や、兼家の怪異体験についての考察などに、首肯しえない点があり、検討の余地があると思われるので、問題となる時平と兼家の用例を中心に考察をする。

まず、塚原氏の述べるところの「怪異黙殺」について考えてみたい。少々長くなるが、引用する。

怪と人の申すことどもに、させることなくてやみにしは、前一条院の御即位の日、大極殿の御装束すとて人々集まりたるに、高御座のうちに、髪つきたるものの頭の、血うちつきたるを見つたりける、あさましく、いかがすべきと行事思ひあつかひて、かばかりのことを隠すべきかとて、大入道殿に、「かかることなむさぶらふ」と、なにがしのぬして申させけるを、いと眠たげなる御気色にもてなさせたまひて、ものも仰せられねば、もし聞こしめさぬにやとて、また御気色たまはれど、うち眠らせたまひて、なほ御いらへなし。いとあやしく、さまざま

大殿籠り入りたりとは見えさせたまはぬに、いかなればかくてはおはしますぞと思ひて、とばかり御前にさぶらふにぞ、うちおどろかせたまふさまにて、「御装束は果てぬるにや」と仰せらるるに、聞かせたまはぬやうにてあらむと、思し召しけるにこそと心得て、立ちたうびける。げにかばかりの祝の御こと、また今日になりてとまらむも、いまいましきに、やをらひき隠してあるべかりけることを、心肝なく申すかなと、いかに思し召しつらむと、後にぞ、かの殿もいみじう悔いたまひける。さることなりかしな。されば、なでふことかはおはします、よきことにこそありけれ。

(雑々物語 四〇四頁)

人々は「怪」であると噂したと書かれてはいるが、そもそも、これは果たして、「怪異」として扱ってよいものだろうか。花山院を退位に追い込み、兼家にとっては待ちに待った、孫一条天皇の即位当日の出来事は、反兼家勢力からの妨害工作と見てよいと思われる。

兼家の経験した怪異現象と言えるものは、以下に挙げる逸話である。

「御厩の馬に御隨身乗せて、粟田口へつかはししが、あらにはるばると見ゆる」など、をかしきことに仰せられて、月のあかき夜は、下格子もせで、ながめさせたまひけるに、目にも見えぬものの、はらはらとまゐりわたしければ、さぶらふ人々は怖ぢさわげど、殿は、つゆお

どろかせたまはで、御枕上なる太刀を引き抜かせたまて、「月見るとて上げたる格子おろすは、何者のするぞ。いと便なし。もとのやうに上げわたせ。さらずは、悪かりなむ」と仰せられければ、やがてまゐりわたしたしなど、おほかた落ち居ぬことどもはべりけり。

(兼家伝 二四二頁)

ここで重要なのは、怪異に遭遇したときの兼家は自邸でくつろいでいるという状況にあったことである。自分の楽しみのために怪異を封じようとしている点も、後述する時平と忠平の場合とは完全に異なっている。また、この東二条邸(後の法興院)では気味の悪いことが多発するので、そこに逗留するのをやめるよう、人々が再三説得したにも関わらず、兼家はそれを無視し、結局はその邸で亡くなってしまった(兼家伝)と語っている。これは、兼家が一旦は怪異を圧倒したかのように見えながら、結局はその怪異に屈服させられたことを語る逸話であると捉えるのが正しいのではなからうか。

次に、時平の怪異体験について考える。

また、北野「道真」の、神にならせたまひて、いとおそろしく雷鳴りひらめき、清涼殿に落ちかかりぬと見えけるが、本院のおとど「時平」、太刀を抜きさけて、「生きてもわが次にこそものしたまひしか。今日、神となりたまへりとも、この世には、我に所置きたまふべし。いかでかさらではあるべきぞ」とにらみやりてのたまひ

ける。一度はしづまらせたまへりけりとぞ、世人、申しはべりし。されど、それは、かのおとどのいみじうおはするにはあらず、王威のかぎりなくおはしますによりて、理非を示させたまへるなり。 (時平伝 九〇頁)

時平の一喝によって、雷神となった道真は静まるのであるが、「一度は」と限定されているだけでなく、その後次々と時平の子どもたちが早世する記述が並べられる。また、道真の怨霊は、時平に屈服したのではなく、「王威」に対する「理非」を示して鎮まったのだと言う。つまり、先に見た兼家の逸話と同様、道真の霊を制圧したのは、時平の力ではなく、一旦は屈服させたかに思われた怪異に、最終的には敗北してしまう話なのである。

一方で、これと比較すべきなのが、次に挙げる忠平の用例である。

この殿、何御時とは覚えはべらず、思ふに、延喜・朱雀院の御ほどにこそははべりけめ、宣旨奉らせたまひて、おこなひに陣座さまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせたまふに、ものけはひして、御太刀の石突をとらへたりければ、いとあやしくてさぐらせたまふに、毛はむくむくと生ひたる手の、爪ながく刀の刃のやうなるに、鬼なりけりと、いとおそろしくおぼえけれど、臆したるさま見えじと念せさせたまひて、「おほやけの勅宣うけたまはりて、定にまゐる人」とらふるは何

者ぞ。ゆるさずは、あしかりなむ」とて、御太刀をひき抜きて、かれが手をとらへさせたまひければ、まどひてうち放してこそ、丑寅の隅さまにまかりにけれ。

(忠平伝 九六頁)

ここで注目すべきは、忠平が自身を「おほやけの勅宣うけたまはりて、定にまゐる人」と規定している点である。つまり、公務中の自分を害することは、官僚国家の頂点に位置する帝に齒向かうことになると言っているのである。帝の任命した左大臣である自分の次席にいた右大臣道真は、死してもその席次を守るべきだと主張する時平の言葉にも、同様の論理が用いられている。しかし、時平のときに示された「王威」による制圧という認識は、忠平の場合には適用されない。ここに、時平と撰関家嫡流の忠平に対する『大鏡』の見解の差を読み取るべきである。

続けて、師輔と道長の怪異体験の用例を見てみる。

この九条殿は、百鬼夜行にあはせたまへるは。……いみじう夜ふけて、内より出でたまふに、……御下簾うるはしくひき垂れて、御笏とりて、うつぶさせたまへる気色いみじう人にかしこまり申させたまへるさまにておはします。 (師輔伝 一六五―六頁)

内裏からの帰宅途中、百鬼夜行に遭遇した師輔は、平伏し畏まっていたとする。

また、道長の体験は、彼の夢の中でのことであり、これま

で見た例とは様相を異にしているが、

殿「「道長」の御夢に、南殿の御後、……そこに人の立ちたるを、たれぞと見れど、顔は戸の上に隠れたれば、よくも見えず。あやしくて、「誰ぞ誰そ」と、あまた度問はれて、「朝成にはべり」といらふるに、夢のうちにもいとおそろしけれど、念じて、「なかかくては立ちたまひたるぞ」と問ひたまひければ、「頭弁「行成」のまゐらるるを待ちはべるなり」といふと見たまふて……

(伊尹伝 一八七頁)

と、怪異に遭遇した場所も内裏の中の「南殿の御後」であり、出仕途上という設定と見てよいだろう。師輔の場合も、「内より出でたまふ」た、つまり、公務から帰宅する道すがらのことであった。

もうひとつ注目すべき点がある。それは、怪異に遭遇したときの心理状態である。先に挙げた忠平は「いとおそろし」と感じている。怪異への畏怖の念は、師輔と道長にも見られた。師輔は、ひどく畏まった様子で平伏していたし、道長は夢の中でありながら、忠平同様「いとおそろし」と感じたというのである。

それに対し、時平にはそのような感情描写は見られない。また、兼家については、「つゆおどろかせたまはで」という記述や、狸寝入りといった態度を記しており、この二人については怪異への畏怖の念が叙述されない。

つまり、ここで明らかにするのは、撰関家嫡流の人物における兼家の特異性である。怪異に遭遇した嫡流の人物の場合、兼家を除いては、遭遇した場所はすべて内裏(道長は夢の中ではあるが)もしくは内裏からの帰宅途中であり、また怪異現象に対して畏怖を抱いている。しかしながら、兼家の体験は、それらから逸脱しており、そして、その怪異を一旦は制圧したかのように見えながら、結局はそれによって死に到るのである。

以上の考察から、怪異体験は、撰関家嫡流の人物に共通して見られるが、傍流である時平にも見られる点、及び、兼家のそれについては、他の嫡流の人物とは一線を画すものである点が確認できた。つまり、怪異体験の有無は、その人物が撰関家嫡流の人物たりうることを保証するものではないと言えるだろう。

四 兼家の特異性

前章までの「魂」の用法や怪異体験についての考察から、「魂」や怪異体験が、撰関家嫡流の人物にのみ与えられるものではないことと、兼家の特異性が浮かび上がってきたことが確認できた。それでは、撰関家嫡流の人物にしか見られない記述とは、どのようなものだろうか。結論から述べると、「魂」といったような、一語での表現は見出すことはできなかった。しかし、それらの人物に共通する属性

があることがわかった。

まず、基経に關しては、童殿上していた頃の出来事として、芹川への行幸の際、帝が紛失した琴の爪を探すように命じられたときの逸話がある。

「これ「一琴の爪」求め出でたらむ所には一伽藍を建てむ」と、願じ思ひて、求めたまひけるに、出できたる所ぞかし、極楽寺は。幼き御心に、いかでか思し召しよらせたまひけむ。
(藤原氏物語 三五〇頁)

これに類するものが、忠平にも見える。

さて、「基経」やむごとくなくならせたまひて、御堂建てさせにおはします御車に、貞信公はいと小さくて具したてまつりたまへりけるに、法性寺の前わたりたまふとて、「忠平」「父こそ。こここそ、よき堂所なんめれ。ここに建てさせたまへかし」と聞こえさせたまひけるに、
(藤原氏物語 三五二頁)

基経、忠平に共通するのは、幼少時に造寺を思い立つというものである。また、忠平については、次のような逸話も語られる。

この貞信公には、宗像の明神、うつつに、ものなど申したまひけり。
(忠平伝 九三頁)

夢ではなく「うつつ」の状態で、神と会話ができたというのである。

師輔については、日頃物の怪に苦しめられ、不例がちで

あつた冷泉天皇が、大嘗会の御禊のときには、普段の病惱が嘘のように、非常に端正な姿で行幸に望んだ理由として、

「それは、人の目にあらはれて、九条殿になむ御うしろを抱きたてまつりて、御輿のうちにさぶらはせたまひける」とぞ、人申し。
(師輔伝 一七一頁)

と、祖父である師輔の靈が守護していたためであるとしている。「大鏡」には、靈になる人物が複数登場するが、それらはすべて祟る靈であり、護る靈となるのは、師輔ただ一人であり、これは彼の超越性を示す逸話と考えられる。

また、師輔は次のようにも語られる。

おほかた、この九条殿、いとただ人にはおはしませぬにや、思し召しよるゆく末のことなども、かなはぬはなくぞおはしませしける。
(師輔伝 一六八頁)

彼は「ただ人」ではなく、おおよそ考えつく限りの望みという望みは、叶わないことがなかったというのである。

そして、師輔と同じく、「ただ人」ではないという表現は、道長にも見られる。

翁らがさがな目にも、ただ人とは見えさせたまはざめり。なほ権者にこそおはしますべかめれとなむ、仰ぎ見たてまつる。
(藤原氏物語 三五二頁)

以上のように、藤原撰関家嫡流の人物には、幼少時代から寺院の建立を思い立つ、神と会話する、靈となつて子孫を守護するなど、「ただ人」ではない逸話が共通して見られる。し

かし、例外的にこのような逸話を持たないのが、兼家なのである。それどころか、兼家については、以下に示すように、称賛よりもむしろ批判的な記述が目につく。

内にまゐらせたまふには、さらなり、牛車にて北の陣まで入らせたまへば、それよりうちはななばかりのほどならねど、紐解きて入らせたまふこそ。されど、それはさてもあり、相撲の折、内「一条天皇・春宮」「三条天皇」のおはしませば、二人の御前に、なにもおしやりて、汗とりばかりにてさぶらはせたまひける。

(兼家伝 二三八頁)

帝と東宮が自分の孫であるからと、礼を失しただらしない下着姿で御前に伺候していたことや、住居である東三条殿の西の対を清涼殿を模して造営し、内装も帝の住まいそのままであったことに対して、世間の人々が、目にあまる暴挙であると非難したことなどを語った後、以下のように述べる。

なほ、ただ人にならせたまひぬれば、御果報のおよばせたまはぬにや。さやうの御身持ちにひさしうはたもたせたまはぬとも、定め申すめりき。

(兼家伝 二三八頁)

嫡流の人物については、その「ただ人」ならざる逸話を語る『大鏡』が、兼家については例外的に、そのような逸話を語らないばかりか、「ただ人」であると言ひ、果報が及ばないとまで言うのである。無論、この「ただ人」とは、常人という意味ではなく、臣下という意味で用いられており、師輔や

道長の場合とは異なる用法である。しかし、やはり対照してよい表現であろう。

それだけではない。兼家については、不遜な態度を続けていては栄華は長く続くはずがないと、人々が噂しあつたと、痛烈な批判が記される。その一方で、師輔が撰関にならず終いで、早世したことに対しては、「口惜し」(師輔伝)という表現が見え、ここでも兼家との対照性が顕著にうかがえるのである。

つまり、怪異体験同様、兼家は道長の父であるにも関わらず、撰関家嫡流の人物に共通する逸話を排除した形で語られているのである。

五 おわりに

以上、『大鏡』における「魂」観の再検討と、撰関家嫡流の人物に固有の逸話について述べた。そこから明らかになったのは、「魂」とは、これまで捉えられてきたような、主流の人物のみに見られる最重要の価値観ではないということである。しかしながら、「魂」という語をもって評される人物は、世を渡る才覚がある、逆境にあつても誇りを持ち続けるなどといった共通点を有しており、やはり従来から指摘されてきたように、『大鏡』を読み解く上で重要なテーマであることに間違いはないだろう。

つまり、「魂」とは、撰関家嫡流の系譜に位置する人物を

貫く軸となる語ではないが、『大鏡』の人物に対する評価の姿勢を示すものであり、主流とはなりえなかったが、高い評価を与えられる人物に対して用いられる語と考えられる。それに対して、撰関家嫡流の人物に共通する、主流たりうることを保証する指標として、常人ではない逸話群というものがあつたことを述べた。

しかし、兼家にはそのような逸話が見られないだけでなく、「ただ人」であるとしておき、また怪異体験においても、撰関家嫡流の人物の系譜から外されていることが明らかにあつた。だが、列伝の位置という点においては、兼家は嫡流の人物の枠から外れていないわけではない。また、『大鏡』には、兼家を左遷した兼通に対する非難の言も見えることから、そして何よりも道長の父であるという点からも、嫡流の系譜から完全に排除されているとは言えない。

つまり、『大鏡』において兼家は、撰関家嫡流の枠内に位置しながらも、基経、忠平、師輔、道長の四人とは、一線を画した存在として描かれていると言えるだろう。このような兼家をめぐる記述については、撰関家嫡流の系譜とは別の、もうひとつの系譜の存在を示唆するものであると考えているが、それについては別稿にて考察を加えたい。

注

(1) 本稿においては、「撰関家嫡流の人物」という語を、道長の直

系の父祖と道長本人、つまり基経、忠平、師輔、兼家、道長を指すものとして用いる。

(2) 『大鏡の表現』(『文学』第35巻9号・一九六七年九月)

(3) 『大鏡新考 総釈・論考篇 下』(學燈社・一九七四年)

(4) 『歴史物語論考』「第四章『大鏡』創作の根底にあるもの」(笠間書院・一九八六年)

(5) 『大鏡の人びと——行動する一族』第三章「もののはれ」のころ(下)(中公新書・一九八七年)

(6) 『時平像の形成』(『国語と国文学』第80巻第6号・二〇〇三年六月)

(7) 以下、『大鏡』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。なお、本稿においては、古本系に見られる記述を説明することを企図しているため、異本系・流布本系にのみ見られる増補記事は、ひとまず調査の対象外とし、必要があれば、注で参照する程度にとどめる。

(8) 『左京大夫道雅』(『平安後期歌人伝の研究 増補版』・笠間書院・一九八八年)

(9) 「にはかに、「若宮の御髪かいけづりたまへ」など、御乳母たちには仰せられて、大入道殿、御車にうち乗せたまつりて、北の陣よりなむおはしましけるなどこそ、伝へうけたまはりしか」(師輔伝 一五四頁)とある。

(10) 『大鏡構成と怪異現象』(『人文研究(国語・国文学)』第36巻第8分冊・大阪市立大学文学部・一九八四年二月に初出)河北騰編『大鏡・栄花物語』(日本文学研究大成)・国書刊行会・一九八八年に再録)

(11) 松本治久氏(『大鏡の構成』・桜楓社・一九六九年)が指摘され

るように、「大鏡」において、主流と認定される人物は列伝が長幼の序に關係なく、兄弟間の最後に配置されるなどの特徴が見られる。このような点や、道長直系の父祖でないという点からも、時平を主流と規定する点には賛同しがたい。

(12) 異本系及び流布本系には、「御物忌の折は、わたりたまはむとて、「おはしましてはいかがある」と、占せさせたまひて、その度、法興院にて病づきてうせたまひにき」(兼家伝 二四一―二四二頁)という増補記事も見られる。

(13) 『富家語』第一〇五条に、世尊寺の南庭にあった墓を取り潰したところ、巨大な尼姿の遺体が掘り出されたが、その遺体は風によって一瞬にして四散。その後、伊尹は早世、一条摂政家の家運も衰退したという話が見える。(『宇治拾遺物語』にも類話(巻六ノ二「世尊寺ニ死人ヲ掘出事」)がある。)兼家伝に描かれた法興院における怪異譚も、この説話同様、邸宅をめぐる怪と考えられる。

(14) 『大鏡』における「南殿」という空間の問題については加藤静子氏に詳細なご論(『王朝歴史物語の生成と方法』Ⅲ『大鏡』の方法 第七章 背景としての内裏・大内裏という空間・風間書房・二〇〇三年)がある。

(15) 道真(時平伝)、元方(師輔伝)、朝成(伊尹伝)、顕光(兼通伝)がいる。

(16) 兼家の系譜からの逸脱については、稲垣智花氏「『大鏡』における北家の位相——疎外される兼家——」(『源氏物語と平安文学』第3集・早稲田大学大学院中古文学研究会編・一九九三年)、高橋照美氏「『大鏡』の兼家像をめぐる」(『論究日本文学』73号・立命館大学日本文学会・二〇〇〇年一月)のご論考がある。

兼家が排除される理由として、稲垣氏は、兼家が父師輔の融和しようとしていた源高明を失脚に追いやったためとされ、高橋氏は兼家が道長のスケープゴートの役割を負わされたためと述べられている。

(17) 「かばかり末絶えず栄えおはしましける東三条殿を、ゆるなきことにより、御官位を取りたてまつりたまへりし、いかに悪事なりしかは。天道もやすからず思し召しけむを」(兼通伝 二二〇頁)とある。

(18) 兼家と系譜の問題については、「大鏡」における兼家と三条天皇——もうひとつの系譜——と題して平成十六年度中古文学会秋季大会(平成十六年十月十日 於広島大学)において発表の予定。

※『大鏡』、『栄花物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠った。なお、「」内は私に補った箇所、……は省略した箇所である。

(いしはら・のりこ 本学大学院博士後期課程)